

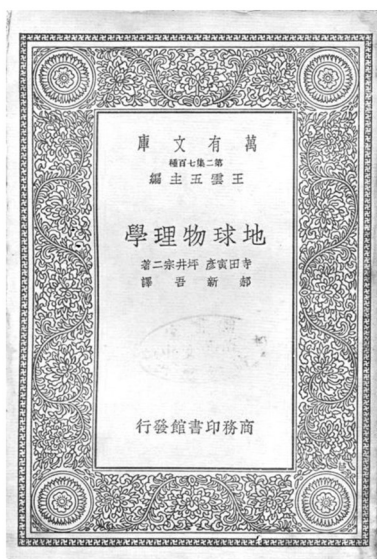
『地球物理学』の中国語訳本と「大陸移動説」

四宮義正

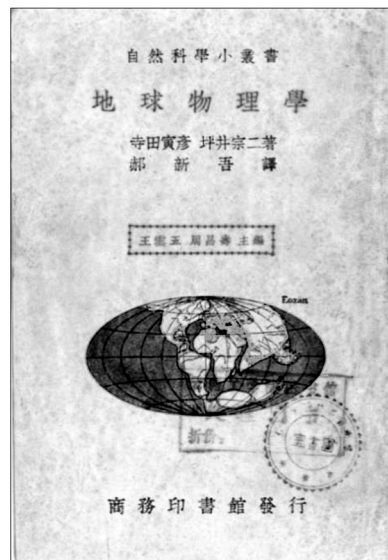
1. 『地球物理学』の中国語訳本

寺田寅彦と坪井忠二の共著である『地球物理学』（昭和8年12月、岩波書店）が中国語に翻訳され、中国で出版されている。この件については、大森一彦氏が国立国会図書館蔵の同書を調査して詳しく報告されている。（同氏書誌選集Ⅱ P.88～91、新資料 寺田寅彦・坪井忠二著『地球物理学』の中国語訳）

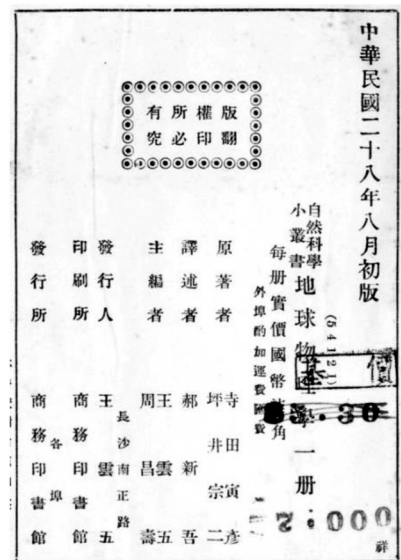
ここに表紙を示して珍しい本を紹介する。（下の左が表紙）坪井忠二は何故か坪井宗二と名前を変えられている。また岩波版にあった寺田寅彦による「序」と索引は省かれている。王雲五主編、郝新吾訳となっており、奥付によると上海で出版されたようである。ところで、この本には異版がある。（下の中央が異版の表紙、右が奥付）



寺田寅彦・坪井忠二
『地球物理学』表紙
中華民國25年(昭和11)9月
(商務印書館發行)



寺田寅彦・坪井忠二
『地球物理学』表紙と奥付
中華民國28年(昭和14)8月
(商務印書館發行)



ふたつを比べると、25年版表紙は叢書共通装幀のようで、青色唐草模様の地に黒文字、右から左へ書いてあるが、28年版は、題名と主編者は赤字、主編者に周昌壽が加わって、左から右書きであり、中央に世界地図が描かれている。よく見ると、アフリカ大陸を中心に南北アメリカ大陸、インドが非常に接近した図で、右上に Eozän とある。これは本文 82 頁の図で、元はウエゲナーの「大陸と海洋の起源」に掲載されている。寅彦はウエゲナーの大陸移動説にいち早く賛同し日本に紹介しているので、相応しい表紙である。本文は折り込み地図を含めて同じ。奥付の発行者王雲五の横に長沙南正路とあるので、湖南省長沙市で出版されたのかもしれない。なお寅彦日記の大正9年7月28日に「周昌壽君暇乞に来る。」同10年1月7日に「周昌壽君上海から年賀のカードをよこす、美しい三色刷の絵があつてそれが水彩画と支那画の中間物である。」とある。周昌壽は一高、東京帝大へ13年

間留学していて、寅彦の知人だった。記者の萩新吾も九州帝大への留学生だった。

2. 寺田寅彦とウエゲナーの大陸移動説

『地球物理学』は大正4年に文會堂書店から出て、昭和8年に坪井忠二の協力で増補改訂され、岩波書店から出版された。ウエゲナーの大陸移動説は岩波版になって取り入れられている。そこで「大陸移動説」が日本にどのように紹介されたか調べてみたところ、谷本勉「Global Tectonics 論の形成と受容—我が国における大陸移動説の場合—」（平成3年、法政大学教養部紀要）が（反対論も含めて）非常に詳しいことが分かった。この論文を基に寅彦が「大陸移動説」の紹介にどのように関わったか、年表を作成してみた。

日本におけるウエゲナーの「大陸移動説」紹介年表（*1）

西暦	和暦	月 日	事 項	注釈
1909	明 42	3 月	寺田寅彦が欧州留学に出発する。	
1910	明 43		ウエゲナーが初めて大陸移動を構想する。	*2
1911	明 44	6 月	寺田寅彦が欧州からアメリカ経由で帰国する。	
1912	明 45	1 月 6 日	ウエゲナーがフランクフルトで行われた地質学会で、「地殻の大規模な特徴（大陸と海洋）の進化に関する地球物理学的基礎」と題した講演をする。この講演はその年のうちに論文として印刷された。	*3
1915	大 4	2 月 15 日	寺田寅彦『地球物理学』（文會堂書店）出版。（大陸移動説は取り入れられていない。）	
		4 月 24 日	寺田寅彦が東京地質学学会総会で「アイソスタシーに就て」と題して講演する。	*4
		（この年）	ウエゲナー『大陸と海洋の起源』第1版出版。	ドイツ
1916 ～ 1917	大 5 ～ 6		寺田寅彦が中央気象台の談話会でウエゲナーの大陸移動説について話す。（今道周一の聞き書き、開催年月の記憶は曖昧。）	*5
1920	大 9		ウエゲナー『大陸と海洋の起源』第2版出版。	ドイツ
1922	大 11	2 月 16 日	『Nature』に『大陸と海洋の起源』（第2版）の好意的な無署名記事が載る。（筆者は W.L.ブラックといわれている。）	*6
		5 月 1 日	山崎直方が『学芸』5月号に「地殻漂移説につきて」を書き、ウエゲナーの大陸移動説を紹介する。	
		9 月 26 日	藤原咲平が東京地学協会例会で「地形に現われたる巴状について」という講演を行い、ウエゲナーの大陸移動説に言及。ただし大陸移動説を強調したものではない。	
		11 月 22 日	寺田寅彦が天文学談話会で『大陸と海洋の起源』（第2版）について話す。	*7
		（この年）	ウエゲナー『大陸と海洋の起源』第3版出版。	ドイツ
1923	大 12	1 月	寺田寅彦が『ローマ字世界』に「大陸と大洋の成り立ち」をローマ字で書いて、「ウエゲナーの学説」のあらましを説明する。	
		4 月 21 日	寺田寅彦が日本天文学会の春季定会で「ウエゲナーの大陸移動説」について講演する。1910年に大陸移動説を起し、昨年（1922年）第3版が出たと述べる。	*8
		7 月 1 日	上記講演録が載った雑誌『理学界』が発行される。	
1924	大 13	5 月 17 日	寺田寅彦が東京地質学学会総会で「大正十二年九月一日の地震に就て」と題して講演し、ウエゲナーの大陸移動説を擁護する。	*9

1926	大 15	10月 25日	北田宏蔵『大陸漂移説解義』（第3版の抄訳・解説）が古今書院から出版される。	
1927	昭 2	9月 20日	寺田寅彦が地震研究所彙報に英文論文「日本海沿岸の島列に就て」を發表。日本海沿岸の島の分布について大陸移動説の立場から生因を解釈する。	
1928	昭 3	8月 25日	仲瀬善太郎による第3版の翻訳『大陸移動説』が岩波書店から出版される。	* 10
1929	昭 4		ウエゲナー『大陸と海洋の起源』第4版出版。	ドイツ
1932	昭 7	10月 3~5日	寺田寅彦が北海道帝大における講義でウエゲナーの大陸移動説の批判に対する再批判を詳しく述べる。	* 11
1933	昭 8	12月 15日	坪井忠二の協力により『地球物理学』増補改訂版が岩波全書で出る。大陸移動説が取り入れられる。	* 12
1934	昭 9	10月 24日	寺田寅彦が水産試験場における海洋学談話会で「日本海の海底地形について」講演し、日本列島誕生にウエゲナー説を適用すると好都合だと話す。	* 13

注釈

- (* 1) 主に谷本勉の論文から、「ウエゲナーの大陸移動説」の日本での初期段階の紹介を抜き出し、寺田寅彦関係を一部追記して表を作成した。
- (* 2) ウエゲナー『大陸と海洋の起源』（第4版の竹内均訳、昭和50年、講談社）による。
- (* 3) 日付、演題は前項の『大陸と海洋の起源』による。
- (* 4) 岩波全集第15巻の同名本文前書きでは26日であるが、寅彦日記に「4月24日 午後地学協会にて講演「アイソスタシーに就て」会議及宴会には欠席す」とある。この講演ではウエゲナーや大陸移動説には触れていない。
- (* 5) 今道周一『岩波講座地球科学』月報2「ヴェゲナーの時代とその周辺—ヴェゲナーに会った最後の日本人?—」（昭和53年）による。寅彦日記に下記がある。
- 大正5年11月25日（土）午後气象台談話会に出席す。
- 大正6年5月21日（月）夕方より气象台の談話会に出席。
- 同年7月9日（月）夕方より气象台談話会に行く。
- (* 6) W.L. ブラッグはX線回折による結晶構造解析の研究で1915年に父のW.H. ブラッグと共にノーベル賞を受賞。この記事を読んだ日本の研究者も多かったであろう。
- (* 7) 谷本論文には出典が無い。寅彦日記は欠けている。天文月報（大正12年2月号）の天文学談話会記事に「十一月廿二日午後三時より六時まで、来会者十六名。天文台官制発表一周年記念にあたり、寺田博士を招き、議論茶菓大いに賑ふ。」とあり、演題「ウエゲナーの大陸と海洋の起源」がドイツ語で書かれている。
- (* 8) 谷本論文には出典が無い。寅彦日記は欠けている。全集第15巻の同名本文、後記にも講演日の記載が無い。天文月報（大正12年4月号）の春季定会広告頁に開催日付と講演予告「ウエゲナー大陸移動説 理学博士寺田寅彦」がある。同誌の同年6月号に定会報告があり4月22日開催となっているが、21日の間違いであろう。
- (* 9) 全集第15巻の同名本文前書きに講演日の記載がある。また寅彦日記に、「5月17日午後地質学会総会、「大正十二年の地震に就て」を読む。」とある。この講演は若干の修正を加え「相模湾海底変化の意義並に大地震の原因に関する地球物理学的考

察」として震災予防調査会報告第百号乙（大正 14 年 3 月）に収載されている。

(*10) 昭和 3 年 6 月付けの訳者序に「尚此の仕事に就ては寺田博士に一度眼を通して頂いて多少改訂を加えて頂いた。衷心からの謝意を表する次第である。」とある。仲瀬は旧制広島高校で物理学と数学の教師をしていた。寅彦日記に次の記載がある。

大正 15 年 9 月 5 日（日）Wegener 翻訳の直し。

昭和 2 年 8 月 1 日（月）久しく打ちちゃらかしにしてあった Wegener の仲瀬訳に又手を入れはじめる。此れ程の難義な仕事に会った事は少なし。

この後、8 月 11 日、14 日、18 日、22 日にも同作業の記事がある。

(*11) 中谷宇吉郎「札幌に於ける寺田先生」(『寺田寅彦の追想』昭和 22 年、甲文社)。

(*12) 坪井忠二は『岩波講座地理学』の「大陸及び海洋の生成に関する地球物理学的緒論説」(昭和 6 年)でウエゲナーの大陸移動説を紹介しているが、賛成している訳ではない。増補にあたり大陸移動説を追加したのは寅彦の意志であろう。

(*13) 寅彦日記は欠けている。日付、主催者は中野猿人「海洋学談話会」(『海の談話室』昭和 45 年、講談社)による。演題と同名の英文論文が地震研究所彙報(昭和 9 年 12 月)に出ている。

第百十五回
十一月廿二日午後三時より六時まで、來會者十六名
天文會官制發來一週年紀念にあたり、寺田博士を招き、聯
論茶菓大いに賑ふ。
Lichtenstein: Untersuchungen über die Gestalt der Himmels
körper. Abh. 2. u. 3. Jahrg. Zeitschr. 19. 2. 萩原雄祐君
A. Wegener: Die Entstehung der Kontinente und Ozeane.
Die Wissenschaft Bd. 66. 寺田寅彦君

廣告
會則に依り今四月本會春季定會を開く、會場、開會日時及順序
等左の如し
會場 本郷區東京帝國大學理學部中央講堂
日時 四月廿一日(土)曜日午後一時開場 一時半閉會
順序 大正十一年度報告、會長、副會長選舉
講演 午後二時開始演題及講演者左の如し
星の大小 理學士 神田 茂君
ウエゲナー大陸移動説 理學博士 寺田 寅彦君
天體觀望(會員に限り)
四月廿一日午後六時半より同九時半まで(曇、雨天なる時は中止)
大正十二年四月
日本天文學會
注意
一、出席會員は各自の名刺に日本天文學會特別會員又は通常會員と記し受附掛
に渡されし
一、講演は一般公衆の傍聴を歓迎す但し開演前十分入場のこと
一、來會者は靴又は草履のこと、男子は洋服又は袴着用のこと



左 天文月報 第 16 卷 2 号 (大正 12 年 2 月) 天文学談話会報告記事
中 天文月報 第 16 卷 4 号 (大正 12 年 4 月) 春季定例会の広告記事
右 仲瀬善太郎・訳『大陸移動説』の扉 (昭和 3 年、岩波書店) (国立国会図書館蔵)

表で分かるように、山崎直方、藤原咲平、寺田寅彦が相前後して「大陸移動説」を日本に紹介したが、地質学者や地理学者を中心に専門家からの反対論が根強かった。移動説を前面に押し出し、継続して支持したのは寅彦だけであった。学説に囚われずに新しい考え方を受け入れて紹介している様子は寅彦の面目躍如である。

最後に谷本の結びの言葉を転記しておく。「大陸移動説の受容の新しい歴史が始まる 1950 年代から 60 年代にかけて、日本がどんな役割を果たしたかを明らかにすることが、今後の重要な研究課題になる。その際の鍵を握るのはやはり寺田であろうと推測される。」